

国内の医薬文献DBについて

－概要と導入状況調査－

加藤麻理¹⁾ 大谷裕²⁾

1)三菱ウェルファーマ(株) 創薬本部 研究推進部 2)東京医科大学図書館霞ヶ浦分館

背景と目的

薬学図書館に職を得て7年になる。この7年間を考えるだけでも、情報検索の主流は、データベース（以下DB）への知識を持つ一部の図書館員やサーチャーが代行して行うものから、エンドユーザーが直接DBにアクセスして検索を行う、いわゆるエンドユーザー検索に移行した。

多様化するユーザーのニーズに応えるため、図書館は様々なDBを検討・導入し提供しているが、一方、専門化・細分化していくDBは利用者にとって多くのストレスを与え、かえって求める情報を得られ難しくしている状況がうかがえる。今後の図書館の大きな役割として、ヒーリーは「図書館は今後、利用者のセルフサービス・スタイルの調査を支援し、促進することにエネルギーを傾注することになるだろう。図書館員の新しい役割として強調されるのは、デスクトップに使いやすい調査用インターフェースを構築することであり、そのうえで、利用者が全体像を理解するために必要な「情報リテラシー」の基盤を提供することであろう」と述べている¹⁾。図書館員は今後よりいっそう、DBとそれを取り巻く環境について注意を払う必要があるであろう。

ひるがえって自身を省みるに、日頃明確に意識してDBと向き合っているかという点も非常に心もとない状況である。そこで国内医薬文献のDBについての知識の習熟を図るとともに、日本薬学図書館協議会及び日本医学図書館協会加盟館を対象に導入状況のアンケート調査を行い、現状の把握及びDBの有効な提供方法及びそれを行うためのスキルなどについて模索したい。

調査方法

- 1) 日本の医学薬学文献を検索するための代表的DBである、医学中央雑誌刊行会(JAMAS)の「医学中央雑誌ファイル」、科学技術振興機構(JST)の「JMEDPlus ファイル」、日本医薬情報センター(JAPIC)の「JAPICDOC」を中心に、国内で提供されているDBの概要・特色及び提供形態を整理し比較する。
- 2) 上記DBの主なユーザーである、日本薬学図書館協議会及び日本医学図書館協会加盟館を対象に、DBの導入状況やエンドユーザーへの提供方法及びDB全般に対する要望についてアンケート調査を行う。

¹⁾ ヒーリー, レイ・ワトソン. 進化するコンテンツ利用者-新しいタイプの利用者の役に立つために図書館はどのように変化すべきか. 情報管理 2004;47(9):579-592